

〔論文〕

ファッション購買意思決定への家族からの影響に関する考察： 拡張自己概念を手がかりに

木村純子 / 坂下玄哲

はじめに

消費者の購買意思決定はさまざまな要因によって影響を受けることが指摘されているが (Belk 1975; Bettman et al. 1998), 特に若年層の消費者においては、彼らの家族からの影響が強いことが主張されている (Moschis 1985)。とりわけファッション購買は消費者の外見やイメージを形成する上で重要な役割を担うため、彼らにとっても重要な意思決定となると言える。しかし、本稿の焦点である娘、とりわけ、女子高生のような知識や経験が限られた比較的若い世代の消費者においては、そのような意思決定は難しいものとならざるを得ない。このような局面においては、娘の家族、特に母親が大きな影響を及ぼすが、日本のような母娘関係が比較的緊密な文化圏ではその影響の出方も独特のものとなる。

本稿の目的は、購買意思決定に対する家族からの影響について、特に日本の母娘関係という文脈において考察することにある。母親が娘のファッション購買に干渉しようとする局面を、Belk (1988) によって提唱された拡張自己 (Extended Self) 概念と関連づけて捉えることにより、より深い現象の理解を試みる。本稿によって実施された、8組の母娘に対する2種類のデプスインタビューから、2つの興味深い発見が得られた。第一に、母親は自らの娘を拡張自己として捉えているが、その認識度合いには多様性がみられた。第二に、母親が娘を拡張自己と見なす程度に応じて、娘のファッション購買への干渉の仕方も異なったものとなっていた。具体的には、娘を拡張自己と見なす程度が強く、娘を所有している感覚の強い母親は、より直接

的に娘の衣服に干渉しようとしていた。これに対して、そのような程度が弱く、娘を所有している感覚の弱い母親は、娘の衣服に対してより間接的なやり方で干渉するか、もしくは、干渉自体を控えるよう努めていたことがわかった。

以下ではまず、拡張自己や家族からの影響、日本における母娘関係といった、本稿のキー概念に関わる既存研究を整理した上で、命題を抽出する。次に、本稿が実施したデプスインタビューについて説明し、主要な発見事項を記述する。最後に、発見物の理論的、実務的貢献について議論し、本稿が抱える限界と、今後の研究の方向性について述べる。

母親の拡張自己としての娘

Belk (1988) によって提唱された拡張自己概念によれば、消費者は自身の核となる自己像を保有しており、さまざまなモノを所有することを通じてその自己を拡張してゆくとされる。消費者によって拡張自己の一部とされる対象物にはさまざまなものがあるが (Belk 1988; Mittal 2006), 所有を通じて拡張された自己の一部になるという点において、同概念は感情的な愛着や製品重要性とは異なる。拡張自己概念に対してはいくつかの批判がなされているものの (Cohen 1989), 消費者行動を理解するための非常に重要かつ有用な概念の一つであることは疑う余地がないだろう (Belk 1989)。

キーとなる所有を通じて消費者は自身の自己を拡張したり強化したりすることが知られているが (Belk 1988; Ahuvia 2005), 拡張自己の対象物としてはさまざまなモノがこれまでに指摘されてきている。そのような対象物として、たと

えば職場にあるモノ (Tian and Belk 2005), 個人のウェブサイト (Schau and Gilly 2003), お気に入りのモノ (Ahuvia 2005), 美容整形における身体の一部 (Schouten 1991), ペット (Kravets and Tari 2008; Hill, Gaines and Wilson 2008) などがある。また Belk (1988) は, 拡張自己の対象物の特殊形として, コレクション, 金銭, ペット, 他者, 身体の一部を挙げている。本稿はこのうち, 拡張自己としての他者に焦点を当てる。

消費者が他者を拡張自己として扱うことは, たとえば「衣服を身にまとうように恋人を連れ歩く」といった文脈で語られてきたものの (Belk 1988), 具体的な研究については希少である。数少ない研究の例として, 自身の娘を拡張自己とみなし所有することを通じて, 自身が成し得なかった夢を代わりに実現させようとする母親の姿を取り扱ったものがある (Sakashita and Kimura, forthcoming; Kimura and Sakashita, forthcoming)。実際, 日本では娘が成人してからも同居する家庭が多く, 母娘関係は比較的緊密であると言える (土居 1971; 信田・上野2008)。したがって, 母親からの娘への影響は多岐にわたり, ファッション購買についてもあてはまると予想される。具体的には, 母親は自身の自己の延長としての娘に対して, 彼女の衣服購買についていろいろと干渉すると考えられる。

ファッション購買への家族からの影響：日本における特殊性

一般的に, 自己概念の形成において, 消費者は自分以外の誰かからの影響を受けることが多いと考えられているが, 彼らの自己概念の形成に影響を与える他者は「重要な他者 (Significant others)」と呼ばれている (Mead 1934)。子どもにとっての重要な他者は親であり, 特に娘にとっては母親がそれに相当すると言われている (Surry 1985; Bohannon, Rolands, Blanton, and White, 1999)。

子どもの社会化 (Socialization) において親が重要な役割を演じることは, これまでも数多くの研究において指摘されてきている (Roedder John 1999; Sullivan, 1947; Turner, 1962)。社会化

とは, 他者との相互作用を通じて, 個人が社会における価値や態度, スキル, 知識, 動機づけなどを獲得し, その結果としてある一定の思考パターンを形成するプロセスのことである。娘の態度形成においては, 母親の存在は非常に重要な役割を担っていることが指摘されている (Acock and Bengston, 1978)。その結果として, 娘は母親の行動や価値, 思考様式や意味体系などの多くを自らに取りこむ。こうしたプロセスによって, 娘は母親のようになるとされる (Chodorow, 1978; Boyd, 1989)。そして母親は, 多くの場合において, 娘に消費の手本を示すことが報告されている (Gavish, Shoham, and Ruvio, 2010)。実際, 息子が自らを父親のようだと認識するよりも, 娘が自らを母親のようだと認識することのほうが多いと言われている (Chodorow, 1978)。

日本における母娘関係は緊密であると言われており (土居 1971; 信田・上野2008), 彼らの消費様式にもその影響が色濃く出ることが予想される。実際, 成人した娘がなお両親と同居し, 娘と母が女友達のように連れ立ってショッピングや映画鑑賞を楽しむ姿は, 日本ではごく一般的な現象と捉えられており, このような母娘をターゲットとした商品やキャンペーンなども数多く存在する (信田1997)。土居 (1971) は甘えという概念を用いつつ, 日本人特有の他者への依存という現象を説明している。「甘え」とは依存を表わす概念であり, 「乳児の精神がある程度発達して, 母親が自分とは別の存在であることを知覚した後に, その母親を求めること (土居 1971, 117ページ)」を指した言葉である。乳児は, 母親が別個の存在であると知覚した際, 自分にとって母親が必要不可欠な存在と感じ, 母親に依存するためにさまざまな行動をとるとされる。日本においては, 甘えは乳児に限ったものでは決してなく, 子どもや, 時には成人においても確認されうるものである (Clammer 1997; Takemoto, 1986)。

しかしながら, 日本における母娘関係は, 娘が母親に依存するという単純な関係として捉えるべきものではないという指摘もある。母親との相互作用において, 日本の娘は一見すると自

立した姿勢に欠けているように見えることが多い。しかし実際は、娘が母親に単に依存しているのではなく、娘が自分の母親を積極的に助けてあげている側面もあるのである (Takemoto, 1986; Maeda 2008)。Maeda (2008) によれば、娘が両親に経済的に依存しているように見える状況においても、実際は両親が自分たちの娘を傍に置いておくために経済的支援を行っているケースが報告されている。これはむしろ、親が子どもに依存するという現象であり、土居 (1971) の主張する甘えの構造とはまったく異なる性質のものである。このように、日本の娘は単に母親に依存するだけでなく、積極的に母親を助けてあげる側面も有していることに注意する必要がある。

娘が精神的に自立し、自身の意志や考えを確立するようになると、母親とは別の思考様式を保持することも十分にありうる。先の拡張自己に関する議論によれば、母親は娘を自身の拡張自己として所有する側面があることが指摘されていた。しかしながら、自身の娘が異なる意志や考えを有するようになると、母親はそのような娘を所有するという感覚を弱めざるを得ないことが予想される。したがって、母親からの娘の購買行動への干渉の仕方も異なってくると考えられる。これまでの拡張自己に関する研究の多くは、その対象物としてモノを取り上げたものが圧倒的に多い (Tian and Belk 2005; Schau and Gilly 2003; Ahuvia 2005; Schouten 1991など)。しかし、本稿が取り上げる母親にとっての娘という他者には、主体とは異なった別の価値観や意思を持って自ら行動するという側面がある。ここに、拡張自己の対象物としての他者が有する特殊性があると言える。

プロポジション

これまでの議論から、日本における母親は、自らの娘を拡張自己として所有する感覚を有し、娘のファッション購買にもさまざまなやり方で干渉しようとするのが明らかとなった。いっぽうで、日本の娘は単に母親に依存するだけでなく、母親とは異なった独自の思考様式を獲得

する可能性のあることも指摘された。したがって、母親から娘に対する購買意思決定への干渉の仕方もさまざまな形を取りうる。以上より、*日本における母親は娘を自身の拡張自己として所有し、娘の購買意思決定に干渉しようとする。しかしながら、拡張自己としての娘は独自の価値観や思考様式を保有することもありうるため、母親が娘を拡張自己として所有する感覚にはさまざまな水準がある。結果として、母親による娘の購買意思決定への干渉の仕方も多様なものとなる。*

方法

本稿は、解釈アプローチに依拠しつつ、日本における母親が娘のファッション購買意思決定にどのような影響を与えるかについて明らかにするため、2タイプのインフォーマントに対して2種類のデプスインタビューを行った。2タイプのインフォーマントとは、母親と娘である。彼女たちに対して、まず母娘ペア合同のインタビューを行い、その後、母親単独、および娘単独のデプスインタビューを個別に行った。

インフォーマントは合計16名で、母親が8名と、その娘が8名であった。母親の年齢は42歳から48歳で、娘は15歳から17歳であった。すべての母娘は関東地区に同居しており、娘は高校に通っていた。インフォーマントについてまとめたものが表1である。

合同インタビューにおいては、母親と娘に並んで座ってもらい、2名のインタビュアーがそれぞれ質問を行った。質問内容は、彼女たちの普段のファッション購買行動に関するものをメインとして、自身のファッションのスタイルや相手のスタイル、両者の類似点や相違点などについて質問し、母親と娘それぞれに回答してもらった。その後、母親と娘を別々の部屋に移動させて、インタビュアーが1名ずつ個別に質問を行った。個別インタビューの質問内容は、合同インタビューと同様の内容をベースに、相手に対する印象や考えについて追加したものであった。

2種類の調査は同じ日に続けて行い、合同インタビューの直後に個別インタビューが行われた。合同インタビューは1時間程度、個別インタビューは1時間から1時間半程度であった。インフォーマントにはそれぞれ調査への協力謝礼として1万円ずつ、合計2万円が手渡された。インタビューはすべてビデオカメラで録画され、収集された映像データは研究者とは独立の第三者によって文書化された。

記述

収集された質的データの解釈から、拡張自己としての娘を所有する感覚の強い母親と弱い母親の姿が確認された。娘を所有する感覚が比較的強い母親は、1)娘とのかかわりが心理的にも身体的にも緊密であり、2)娘が大人になることを寂しく思い、3)娘のファッション購買意思決定にあたりなんでも忌憚なく言いあうという傾向を示していた。他方、娘を所有する感覚が相対的に弱い母親は、1)娘を1人の人間として人格を持っていると認識し、2)自分の言葉で娘がどう感じるか配慮しながら伝える言葉を選び、3)娘の選択を尊重すべきだと思ひ、4)娘が成長したことを認識し、5)娘のファッション購買意思決定にあたり気遣いながら母親自身の考えを伝えるという傾向を有していた。(このうち1名については、娘を所有する感覚こそ弱いものの、ファッションに関しては比較的率直に意見を伝えていた)。

【娘を所有する感覚の強い母親】

母親2は、自身の娘を所有する感覚の強い母親であるように見受けられた。娘2も母親2のことが大好きで、母親にかまって欲しがっている。親密な2人はいまでも一緒にお風呂に入っており、娘2は、母親2が飼っている犬に優しく接している様子を見て、犬に嫉妬を覚えるくらいである。母親2も娘2の気持ちに応え、できるだけ一緒にいてあげようとしている。

母親2：「いいよね、M(犬の名前)は。いつもどん

な時だってお母さんにベタつくってれば、お母さんは「いい子、いい子」してくれるし、わたしがベタつくって、「重い」とか「わかったわかった」「早く勉強すれば？」って言われるけど、Mって絶対そういう風に言われないもんね」って。

インタビュー：本当に好きなんですね。お母さんのことね。

母親2：(笑) っていうくらいなので。だから、意識をして、ね？特に、大きくなればなるほど、関われる時間って少なくなるじゃないですか。

母親2は娘2が大人になっていくことが嬉しい反面、寂しく感じているようである。娘2が小さいころは、仕事から早く帰ってきて欲しいと言って抱きついてきたと述べている。そして、大きくなってもう自分は必要とされなくなってしまったと感じることがあれば寂しい気持ちになるだろうと述べる。

インタビュー：娘さんが大人の女性に近いうちになっていかれると思うんですけど、どう感じられますか？

母親2：えー？そこはきっと複雑な気持ちになるかなって。嬉しい反面、ちょっと寂しく感じたり。

インタビュー：どういうところが寂しくなっちゃいますか？

母親2：そうですね、あんまり「お母さん、お母さん」って言われなく、今は言われると「忙しいんだから頼むよ」って思ったりもするんですけど、実際それがちよつと無くなってきたりすると、こう、「友達とのつきあいでわたしも忙しいのよ」とか、彼氏とか仕事はどうってなってきた時に、何かちよつと、きつと寂しく。

インタビュー：何か、置いていかれる感じですかね。興味が、他に、ママから他に世界が広がっていつて移っていく感じですかね。

母親2：そういう、何だろう。置いてかれる。ああ、もう昔の「お母さん、お母さん」って言って「お母さん、早く仕事から帰って来てよ」って言ったあのギューっていうのがもうできないよねっていう、寂しさなのかなあ。だから「もう私がいなくても大丈夫なんだね」っていう嬉しさと「また一人、わたしを必要としなくなっちゃったな」みたいな寂しさなのかもしれないですね。きつとね。

娘を所有する感覚が強い母親2は、ファッションの選択でいい／悪いの評価をはっきりと娘2に伝えているようである。

母親2：「それは似合わないよ」とか、「えー、それはちょっと違うでしょ」というふうに、はっきり。

インタビュー：はっきりと。

母親2：(はっきりと) 言って、「それだったら、こっちのほうがいいんじゃない？」っていう提示はするんですけど、そこははっきり言いますね。

インタビュー：言い出しにくいことはないですか？すごく気に入ってるのに、言ってしまったらかわいそうだなあっていうのは無いですか？

母親2：うーんと。そういう思う時もあるんですけど、きっとそういう時ってわたし、露骨に顔に出てるんだと思うんですね？

インタビュー：(笑) 言葉にはせずとも。

娘2も、母親2とはお互いになんでも言いあえる仲だと認識しているようであった。

インタビュー：ズバズバ言えない時って無いですか？「これはちょっと言えないな」とか。

娘2：いや、無いですね。

インタビュー：(笑)。

娘2：お互いに、わたしが「これよくない？」って言うても、ズバッと言うてくるし、お互いにズバズバ言うてるんで、あんまり無いです。

母親5は、意図していなかったものの、娘5を自分の拡張自己とみなし、所有物として育ててきたと認識しているようであった。

母親5：(私は娘に) 自分の弱いところも見せるし、悩みも聞いてもらうし、その代わり怒るときはすごく怒りますけど。だから(娘には)逃げ場がないっていうのはあるかもしれないな、って今になって思います。子どもがママに甘えられるっていうのがないかな、っていうのはちょっと思ったことはあるんですけど、そこを父親がカバーしてくれるから今はいいっていう風に思います。(略) 私が弱いところっていうか、なんでも(娘に) 見せちゃってる分、「ママがなんとかしてくれる」というよりは、「かなわないなあ」と思っていると思います。(略) 「(娘は) 自分のものだから」という風に

育ててきたつもりはないんですけど。でもやっぱり、ね。

母親5は、子どものことが大好きである。娘5が休みの日に合わせて、母親5が仕事の休みを取るほどである。子どもをかまわなくて済むようになると、自分も寂しくなると考えている。

インタビュー：娘さんをかまってるのが楽しいんですか？ 幸せ。

母親5：かまってる…そうですね。

インタビュー：かまわなくてすむのは寂しい。

母親5：寂しいですね。

インタビュー：置いていかれるって感じですか。

母親5：あ、そうかもしれないですね、だんだん。

インタビュー：そういう感覚ですかねえ。一緒にいたい？

母親8：そうですね、はい。ダメですか(笑)？

母親5は、娘5に手をかけすぎたことを悔やんでいるほどである。娘5が自立できていないように思えるからである。

インタビュー：お母さまは母親としてこれまで16年間、どういうふうに過ごされてきたかというのと、やっぱりすごく手をかけてこれら感じですよ。1人っ子さんだし。

母親5：そうですね。

インタビュー：なんでもやってあげちゃう？

母親5：そうですね。それがほんとに、失敗したこと・・・(笑)。

インタビュー：どうして失敗になっちゃうんですかね？(笑)

母親5：(娘はいろいろなことに) 気づかないっていうのが一番。例えば自分の歩く道に何か落ちていても(拾わないから)、「それをなんで拾わないの？」ってすごい思いますよね。

インタビュー：でも、拾ってあげるからでしょ？

母親5：うん、それも、だからどっちなのかいまだに分からないんですよ。たぶん(娘は落ちていたのが) 見えても無視するときもあるんだと思うんです。でも、ゴミだけじゃなくて「ほんとに気づかないんだな、この子」ということもあるので。心配です・・・

インタビュー：やってあげすぎちゃったっていう(笑)。

母親5：そうですね、きっと。

母親5は時間を戻せるなら高校時代に戻りたいと言っている。なぜならば、現在の娘を自分の姿に重ねられるからである。

母親5：今アドバイスをしているんです。それで「じゃ、ママはどうだったの？」って言われて。だから、「ママはそうじゃなかったからそういう道もある」って。だから、私は「生涯ずっと勉強をしたいな」と思って。でもくじけたりとか、今もね。なので、「だから（あなたもママを）見ててそう思うでしょ？」とか言って。私の後ろ見ててもね。そのときにもっと一生懸命やりたかったかなと今思い出したので、娘との会話で。だから高校のときに戻りたいということかな。

インタビュー：やっぱりじゃあ、それはお嬢さんを、今のお姿に重ねちゃうんですかね。

母親5：自分を？ そうなんだと思います、きつと。

母親5は、娘が大人になるのは寂しいので考えないようにしていると述べている。

インタビュー：娘さんが大人になるときに来るのは楽しみですか。

母親5：あまり考えないようにしています。今を…。

インタビュー：寂しいんだ（笑）。

母親5：ああそうなのかな（笑）。ああ、そうかもしれないですね。もうなんて言うのかな、囲っておけないかな、っていうのもあるし。

娘5も母親5の過干渉を認識している。

インタビュー：逆にちょっと、（お母さんに）ここは直してほしいところがありますか。

娘5：過保護すぎる。分かんないですけど。

娘5は母親5との関係を親密であると考えている。

娘5：（二人の関係は）結構親密だな、と思います。

インタビュー：例えるとどんな？

娘5：友達でもあり母でもあり。

インタビュー：友達でもあり母でもある。

娘5：友達。失礼ですかねえ、分かんないですけど。

インタビュー：いや、素敵だと思いますすごく。友達だとするとどんな友達ですか？

娘5：何でも言える感じですかね。

インタビュー：じゃあ、親友みたいな。

娘5：まあ、私も隠すこともありますけど、そんな隠し事はないんじゃないかなとは思いますがけど。

そんな2人は何でも言いあう仲である。母親5は、娘5が選んだ服をあまり気にいらなかった時は、娘に似合わないとはっきりと言うと述べている。

インタビュー：娘さんが選んだ服をお母さん自身がいまいちだなって思うとき、お母さんもはっきり「似合わないよ」って。

娘5：言います、言います。

インタビュー：お母さん、言い出したいけどちょっと言いにくそうなきつてないですか。

娘5：いや、ないです。

インタビュー：ないですか。いいですねえ。

娘5：え、言い出せないときつてあるんですか？

インタビュー：どうなんだろう。でも、ちょっと遠慮しちゃうときなんかつてあると思ったんですけど。

母親3は、娘3が高校生になってからはあれこれうるさく言わないようにしていると話している。それは、娘3がある成長してきたこともあるが、必ずしも拡張自己の程度が低くなってきたのではなく、言いたい気持ちはあるところを無理に抑えているからである。母親の「我慢」という言葉にも表れている。

インタビュー：お母さまは割と娘さんが高校に入られてからは抑えるように？

母親3：はい。抑えるようにはしていますね。向こうは感じていないかもしれないですけど。

インタビュー：気持ちとしては（あれこれ言いたい気持ちは）変わらない？言うか言わないかで。

母親3：言うか言わないかですね。

インタビュー：もう何も干渉しなくなったというわけではなく、表現をしないというだけで。

母親3：表現しないですね。でもある程度我慢できるようになってきた。向こうがちゃんとやれるようになってきたので…。

娘3の成長は、娘自身も気づいているようである。

娘3：いろいろ思ってることとかなんか顔に出てたみたいで。最近はやんと言葉にするようになったんですけど、一時期は言っちゃいけないと思ってたことがあって。流されやすい部分があったんです。最近はやんと自分の意見を言うようにしたんです。以前はこう不満そうな顔をしたりとかが自然と出てたみたいで。

娘3を自身の拡張自己として所有する感覚を抑え込んでいると考えられる母親3であるが、ファッションに関しては娘3に対してははっきり言うようである。合同インタビューでは、以下のようなやり取りが確認されている。

母親3：結構悩むと、私、はっきり言うね。

娘3：うん。

母親3：「それはやめたほうがいい」って言う。

娘3：「似合わない」(笑)。

母親3：「似合わない」って、なんか言う。「それだったらこっちのほうがいいよ」とか「うちにあるこういうのでカバーできるんじゃない」っていう話をしますよね。

娘3も、母親3に対してははっきりと言うようである。

インタビュー：お母さんが選んだお母さんの服で、ちょっとイマイチだなんて思っちゃったときに、お母さんにはなんて言うんですか。

娘3：「それ、やめたほうがいいよ」って。

インタビュー：はっきり言う。

娘3：はい。

【娘を所有する感覚の弱い母親】

母親1は、娘1に対して自身の拡張自己としてではなく1人の個人として接している。徐々にそうになっていったわけではなく、きっかけがあったと述べている。小学校から中学校に上がるとき、「これからは自分で判断するようにしなさい」と、娘を前に座らせてあらためて伝えていたことに言及していた。

母親1：中学に入る時にそういう話を本人としたんですね。ただ、何か悪い、なんて言うのかな、世間で言う犯罪みたいな、警察にお世話になるようなことがあると、もう先、あ

なたがなりたい先生なんかには絶対なれないし、みたいなちょっと怖い脅し方みたいな。そういうことでちょっとくぎを刺しても、自分がいいと思ったことはそのままやっていけば大丈夫だと思うし、他人がやってても自分が「それは違うな」と思ったら止められる勇気を持てればいいし。そうやっていってもきっと大丈夫なので、(中学に入れば)部活と学校で1日のほとんどを親と離れたところで過ごすようになるから。小学生は帰ってきて「お母さん、お母さん」って相談に来るけど、中学は自分で決断しないといけない場面がものすごく増えるし、すぐ答えを出さなきゃいけない時もあるかもしれないから、そういう時はもう自分の判断になるから、っていう話をした覚えがあって。

娘1も、母親1からそのような言われた出来事自体は覚えていないものの、母親1からは自分で自分のことを決めるよう任されていると認識しているようである。

娘1：けっこうもう(私に判断を)任せるみたいな感じで、「これしなさい」とか「勉強しなさい」とかもあんまり言われないので。

インタビュー：そうなんです、珍しいですね。

娘1：そうですね。昔は言ったらしいんですけど、小学生の低学年ごろは。でも、1回「嫌だ」って言ったらしいんですよ、全然覚えてないですけど。あんまり言うのと、嫌いになっちゃうからって、それからは言わないようにしてるらしくて。でも、放つといってもそれなりにやってるからいいかなと言ってたんですけど。なのであんまり「これしなさい、あれしなさい」みたいなことは言われないです。

母親1は、人の感覚は個々によって異なることから、たとえ相手が自分とは異なる選択をしても否定すべきではないと考えているようである。そのため、娘1のファッションの選択があんまりだと思ってもはっきりとそのことを伝えずに、他の選択肢を出してきたりすることでやんわりと自分の気持ちを伝えると述べている。

母親1：言い出せないっていうことは、ほとんどないと思うんですけど。

インタビュー：こないだの沖繩のお洋服の時に、ずいぶん慎重に選ばれたと思うんですけど、

「あんまり」と思った時には、「それ、あんまりよ」って言う？ それかやっぱり代わりの物を提案型で？

母親1：そうですね。ちょっと矛盾してますね、私。「早く決めなさい」って言うわりには、「もう少し見てみようか？」って、「他のお店をもうちょっと何軒か見てみようか？」っていうふうに言って、とりあえず1回（商品を棚に）置いて。

インタビュー：手放させて。

インタビュー：どうして言いつらいんですか？

母親1：なんかお店の人とかもいるし、商品のことを否定的にいうのが言いつらい場面の時があるし、本人にもあんまりそういうふうにするとうちよっとかわいそうかなと思う気持ちもあるから。やっぱり違うだろうから、感覚って。個々で違うだろうから、それを否定するっていうよりも、「もうちょっと見てみたら変わるかもな」「本人も変わるかもな」っていう期待もあり、自分も「ちょっとあっちのお店の方にもありそうだな」って頭にあれば、それも自分もそう思ってるから言うんであって。どっちなんですかね。でも、だいたいそういうふうにする時は、他にありそうだなって自分で思うことが強いのだと思います。

同様のことは、母親1と娘1の合同インタビューにおいても確認されている。

母親1：どうやって言うかな。「ちょっとこつちと合わせてみたら？」とか。ちょっと組み合わせを変えてみるように誘導してみたりとか。「この服がダメ」とかは言わなくて。

インタビュー：さっき娘さんがおっしゃるような、「それどう？」っていうような言い方はなさらない？

母親1：言わないよね？ 言う？（娘1にたずねる）

インタビュー：どうですか？ 娘さん。お母さんに何て言われます？

娘1：たぶん「ちょっとそれ変えたら」みたいに。

母親1：うん、なんかコーディネートの方のことを言うかもしれないんですけど。「ちょっと薄い色のジーパンのほうが合うんじゃない？」とかは言うと思う。

インタビュー：「それはあんまり」って言い方はされない？

母親1：はい。

とはいえ、娘1にしてみれば、ファッションに関して母親1にはっきりとは言われないもの

の、否定されているように感じてしまうようである。

インタビュー：さっきもお伺いしたんですけど、お二人で買い物に行くときに、意見が合わなくなったときには、だいたいお母さんが先に「早く決めなさい」ってなるって思うんですけど、娘さんが怒っちゃったりってことないんですかね、逆に。

娘1：（私が）「どお？」って言った服たちをあまりにも否定され続けちゃうと、「じゃあ何ならいいの？」みたいな感じにはちょっとなったりします。

母親6は、娘6を制約したくないと考えているようである。言葉にしなくても見守っているような母親になりたいと思っていることを語っている。たとえば、娘6が部活の試合で負けた時には「がんばったね」という慰めの言葉はかえって娘を落ち込ませるだろうと心をくだし、あっさりとした言葉をあえてかけるようにしている。

母親6：試合を見て、試合終わった後とかは「がんばったね」とは言ってますけど、でも、あんまり押しつけがましく、「がんばったね」って言っても負けた日なんかは逆にいやだと思うんですよ、親に「がんばったね」なんて言われるの。自分もいやだと思うので。だから、あっさり「おつかれ」しか言わなかったりとかはしてます。

母親6は、子どもが小さいころからあれこれ口うるさく言うことはなかったと述べている。

母親6：やっぱり中学生ぐらいじゃないですかね。インタビュー：それまでは、ものすごくやっぱり、いろいろしつてたりうるさくおっしゃってましたか。

母親6：うるさくは言わなかったと思います。

母親6は、ファッションに関して、娘6の選択がいまひとつだと思ってもはっきりとは否定しないと述べている。それは、他人から「似合わない」と言われるといい気分にはならないという相手への配慮からである。店頭で買う前には似合わないと言うこともあるが、買ってしまっただけからは「似合わない」や「おかしい」とい

った批判的評価を直接的にすることはないと述べている。

母親6：(略)でも、もしかして、それを着て行く時に、「ええ、こっちのほうがいんじゃないの」って言うかもしれないですね。

インタビュー：お店で選んでる時だったら。

母親6：お店で選んでる時じゃない。買って着ていく時も「今日さ、なんか寒そうだから、それじゃなくてこっちにしたら」とか言うかなとは思いますが。

インタビュー：ダイレクトに「似合わない」っていうとか「おかしい」とはおっしゃらずに。

母親6：そうですね。一応やっぱり、自分もそうですけど、その時はいいと思って買うんだけど、ちょっと熱が冷めて家に帰って家の鏡で見た時は「あれ、似合わない」って自分も思ったりするので。それを人から「似合わないね」って言われるのはやっぱりショックなんですよね。なので「似合わないね」じゃなくて「今日はそれじゃない方がいいんじゃない」とか。「寒いよ」とか、逆に「暑いよ」とか言って変えさせちゃうとか。

娘6も、母親6からファッションに関してははっきりと言われないと認識しているようである。

娘6：(母親は) あんま「やっぱり似合ってない」とかは実際言ってこないの。

インタビュー：ほんとですか。

娘6にとって自分の母親は母親というより姉のような存在であるようである。

インタビュー：母親でいるって大変な部分もあると思うんですけど、お母さんでそういう母親っぽさっていうのは強い方だと思いますか。

娘6：お母さんで感じはしない。なんか普通に気楽な感じの、ちょっとお姉さんも入ってるのかなって感じはしますね。

母親7は、娘とはいえ1人の人間として人格を持っており、他人の判断を押しつけられるのではなく、自分の判断で進まなければいけないと考えているようである。進路や将来についてははっきり言うものの、もし娘が自分で何かを

選択したのであれば、その選択を尊重すべきだと考えている。娘は所有物ではないので、思うようにはならないと考えていると推察できる。

母親7：まず今は、それこそ進路の話だったり、どういう職に就きたいのかとか。英語を保持したいのか、英語を生かすものを、これからはどこに行っても英語は必要だから、それはずっと続けたほうがいい。もし、本人が英語を(大学で)専攻しなくても、趣味というよりも絶対有利だから。英語を武器として続けたら、ということもけっこう言ったりします。(略)英語を保持してもらいたいけれども、最終的には人間はやっぱり押しつけられるものではなくて、自分の気持ちで進んでいかなくてはいけないし、それは選んだらもう本人の気持ちを尊重するしかないと思います。(略)思うようにはならないのですよね、それぞれの人格は。

母親7は「娘と同じペアルックを着ることについてどう思うか」というインタビューからの質問に対して、否定的な反応を示している。たとえ親子であろうとも違う人間であり、娘も人格を持っているのであるから、それぞれが違う衣服を着ている方が自然だと感じられるからと述べている。

母親7：ほかの方(母親と娘)が、もしそうしていた(ペアルックを着ていた)としたら、別にそれをうらやましいとも思わないし、ひやかすわけでもなく「仲良しなんだな」というふうに単純に思うんですけど。でも自分と娘は親子の関係でも違う人間、人格なのだから、お互いに違うものを着て歩くほうが自然なのかな。本当に趣味が合ってたなら、それもありというか、だと思っただけですけれど。だから普段からは(ペアルックは)なしですね。

母親7は、娘7が大人になってきていると感じているようである。

母親7：(娘が)「そういうのは時間が解決するんだよ」とか。私より目線が上のような答えを時々言うのです。そうすると「そうだよ」と。それは分かっているのだけど、つい聞いてしまった自分に対して「まあ、そういうことだね」と。「よく分かっているな」と、会話の中を通して大人になってい

るから。でも、やっぱりそうはいつでも、親と一緒に生活をするときに甘えているところは多分にあるので。

大きな決断の前はあれこれ干渉するものの、ファッションの選択になると母親7は娘7に対してははっきりと言わず、間接的な言い方で意見を伝えているようである。合同インタビューでは以下のようなやり取りが確認されている。

娘7：妥協案を持ってくる。「これは」と。

母親7：「代わりに、これはどう？」というのもありますけど。どうしても時は(母親が気に入らないものは)買ってあげないですね。

娘7：友達と行っているときと比べて、私に勧めてくれるものとか、見ているものが違うので、全然自分が目につかなかったものとかを勧めてくれたりとか、こういう組み合わせ方もあるんだとか、お母さんは世代が違うから、学べたりとかは楽しいです。

母親7：「これに替えたら」とか「この色にしたら」とか。「家では別にいいけれど、外出するのだったらこうして」とか、そういう感じの会話です。

インタビュー：替わりのものを、娘さんのクロゼットから持ってきて？

母親7：私の妹から譲り受けた服とかがあったら、妹は小柄で娘も着られるサイズなので「こういうのをもらっているのだけど、これに替えたら？」とか。

母親8は、娘8と一緒に共有できる時間があることはいいと思うが、娘8は自分とは違うタイプの人間だと思っているようである。

母親8：なんていうか、こう人のいやな部分をほじくるようなところが、ありますね。

インタビュー：冷静なんですね。

母親8：冷静だったり、暗いのか、「なんかちよつと私とは違うな」とか思ったりする。それでもさっきみたいな時間(合同インタビュー)、共有する時間とかあったらやっぱし「ああ、いいな」と思う。

さらに母親8は、娘8から1人の人間として見られ分析されているような気がすると言っている。

母親8：おそらく娘からは母親のことをすごく冷静に見ていると思います。「母」っていう面

よりももしかしたら「あの人間」としてとかそういう冷めた見方みたいなの。母親という関係よりも、分析してるんじゃないかなとかと思います。

インタビュー：そういう目で見られているということで、なんか距離感を感じたりしますか？

母親8：たまに感じます。さっきも(レストランで私が水をこぼした時に)「お母さんはそれで笑ってごまかそうとする」とか。「普段も？」っていったら「普段も」と言われました。

娘8も、自らを大人っぽく考えているようである。自己分析においても、7割が大人で3割が10代の女の子であると答えている。そして、自分はいわゆるJK(女子高生)らしくないと考えていると述べている。

インタビュー：10代の女の子と、じゃあ大人の女性でいることは、娘さんの中ではこう、何%ずつくらい？100%で割ると。

娘8：うん。70と30。

インタビュー：70が10代の女の子で、30が…

娘8：あ、逆です。

インタビュー：あ、逆で、70が大人で、30が10代の女の子。

娘8：あの、ほんとに私JK(女子高生)って感じじゃないと思う。自分で。

母親8は娘8との距離を感じている。寂しい気持ちもあるが、自身も仕事を持っていて忙しいので寂しいと感じている暇はないと述べている。

インタビュー：距離があると寂しいですか？

母親8：そうですね。寂しい、寂しい…。そうですね。ただ自分も幸いにして忙しいので、そこまで感じる間もないかな。ほんとに仲いい親子見てると…親子見てると「いいな」ってすごくうらやましくは思ったりする。

娘8が距離をおいて接してくることについて、母親8には思い当たる節があるようである。娘8が一時期学校で悩んでいた時に、母親8は仕事が忙しかったために娘を支えてあげることができなかったという。母親8は今でもそのときのことを悔やんでいると話している。

母親8:小学校の今思い出せば小学校の中学年くらい
のときにいじめられたか、疎外感がちよ
っとあったときがあったんですけど。そ
の時に1人で泣いていた時があって。その
ときにあんまり真剣に、自分もすごい忙し
くて、ちょうどそれこそ飛び回っているか
んかで真剣に相談にのってなかったかな
って時があったんです。「もっともっと時
間をかけて話を聞いてあげれば良かったの
にな」なんて思ったりします。(略)最初に悩
んでいたときに、もっと一緒にじーっくり
聞いてあげれば良かったかなと思ったりと
か、っていうのがちよっと残っています。

母親8と娘8はなんでも言いう関係である。
それは、娘8を所有する感覚が強いからとい
より、娘8の性格によるものと母親8は考
えている。自分とは違う考え方をする相手として娘
を見ている。

母親8:なんとなく何でも言いうえ。私がなんか
言うと(娘は)裏をかくようなところがあ
る。こういう策略が、思いがあってこう
いう行動でてるんじゃないのみたいな。

インタビュー:(娘さんが) 読んじゃうんだ。

母親8:読んでるようなところが。さっきもそんな
感じのことペロッと「あら、そんなこと考
えてたの」という感じでした。

インタビュー:なるほど。

母親8:「そんな考え方ばっかりしてたら面白
くないじゃん」とか思うんだけど。

逆に、娘8は、期待しすぎると重荷に感じる
かもしれないと配慮してくれるようになってから、
母親8からあれこれ言われなくなったと述
べている。親が子どもに期待しすぎること
でプレッシャーを感じないように、過度の期待を
かけることを緩めてくれたと感じているようである。

インタビュー:なんでお母さんそういう期待を娘
さんに持つてると思います?

娘8:なんでだろう、やっぱりこれから大事だから
じゃないですかね。私が中3のときにも、
応援してくれたのも、お母さんもお父さん
もそうですし、受験のときに。それから
「ああ、期待されてるな」っていうのを感じ
たんですけど。高校になったら、期待
も重荷になっちゃうんで。それ(過度の期
待)を緩めてくれたのかなって感じがします。

娘8は、母親8との関係について、立ち入り
すぎるわけでもなく放任でもなく、適度な距離
感を保てており好ましいと考えているようである。

インタビュー:娘さんとお母さんの関係ってどう
いう関係だと思いますか?

娘8:うーんと、そんなに立ち入らず。そんなに深
くは立ち入らないけど、そんなに放任状態
ではないみたいなの。

インタビュー:適度な距離感みたいなの。

娘8:そうですね。

インタビュー:すごいいいですね、それ。

娘8:そうですね。

インタビュー:どう思います?娘さん、それ自体は。
もうちょっとかまってほしいとか、もうち
よっと放つてほしいとか。

娘8:今の感じが一番いいです。

母親8は、娘8にはまだまだ子どもの部分
があり自分に頼っていると感じているが、ファッ
ションについてはスタイルが定着してきたことか
ら言わなくなったことも出てきたと話している。

母親8:最近だんだんスタイルが定着してきたって
いうか、たぶんおそらく、学校の中の友達
のを見て、それにやっぱり好きな形にだ
んだん決めてきてるような感じするん
ですけど。「あの短い時間でよくそのス
タイル決められるな」とかっていう風
に感心しているけど。高校に入った
ときはまだ悩んでたよねいろいろ。ど
ういう組み合わせをしていいのとか
かって、そういうのを。(略)「それ、
動きにして、ちょっと動きづら
いんじゃない?」とか、(娘の)体形は
(私に)似てるし、「たぶん腕とか太
いとこの動きが大変じゃないの?」
とか、サイズについては(言いま
す)。見た感じがきれいなシルエ
ットを好みたがるじゃないですか。
「でも実際に動いたらやっぱりき
つくない?」「腕が動かないん
じゃない?」とか。そういうこと
とか(を言います)。あと、デザ
インについては最近言わないで
すね。私も。

インタビュー:なぜですか?

母親8:定着してきたって先ほど言
ったんですけど、それもあるし。色
も任せちゃってるっていうか、
そんなおかしいのは着てないと思
ってます。

インタビュー:定着してきた、定着
の着地点がいい感じのところ
に着地した感じ?

母親8:そうですね。めちゃくちゃセンスのある人っていうのは、ちょっと普通の人とは違うようなアレンジなんです。まあ無難なところで収まっているという感じですかね。

ディスカッション

以上のように、収集された質的データの解釈を通じて、大きく2つのことが確認された。第一に、母親は自身の娘を拡張自己として所有する感覚を有しているようだが、その感覚の強さには相対的に強いものと弱いものが存在する可能性があった。第二に、そのような所有の感覚の強さに応じて、母親が娘のファッション購買に干渉するやり方も異なっていた。具体的には、所有の感覚の強い母親はより直接的な干渉を行うのに対して、弱い母親はより間接的なやり方で娘に接していることがわかった。以下では、本稿のもたらした^(仮)含意、および限界と展望について述べる。

(1) インプリケーション

本稿の理論的貢献としては、以下の4点が重要である。第一に、拡張自己に関する研究潮流に対して、拡張自己の対象物が他者である場合の特殊性について明示することによって、同概念の精緻化に貢献している。これまでの研究においては、たとえば Tian and Belk (2005) の職場におけるモノや Ahuvia (2005) のお気に入りのモノなど、自らの意思を有しない対象物を取り上げたものが多かった。しかし本稿では、母親にとっての娘という、拡張自己の対象物としては特殊なケースが取り上げられている。娘が成長するにつれ、母親とは異なった価値観や考え方を持つようになることがあるため、母親は娘を拡張自己として所有する感覚を弱めてゆく局面が多々あるのである。

第二に、拡張自己としての娘に対する所有の感覚の度合いによって、娘の購買意思決定に対する母親からの影響度合いが異なることを示している。本稿によって収集されたデータとその解釈にもあるように、娘を自らの拡張自己として所有している感覚の強い母親は、娘のファッション購買に対して直接的な干渉を行っていた。

これに対して、そのような感覚の弱い母親は、娘にそれとなく別の衣服を選択するよう仕向けることによって干渉するか、または、干渉自体を控えるよう努めていた。このことはすなわち、購買意思決定に影響を与える要因として拡張自己概念を捉える試みであり、消費者購買意思決定に関する研究潮流と、拡張自己概念に関わる研究潮流との架橋を試みたものであるといえる。

第三に、消費者の社会化に関する研究潮流に対して、親子関係、特に日本における母娘関係の特殊性を拡張自己概念と関連づけて示すことによって、思春期の子どもの社会化における多様性を指摘している。親が子どもをサポートするだけでなく、子どもが親を気遣う側面にも焦点を当てることによって、母親が娘を拡張自己として所有する度合いも変わってくることを示している。結果として、母親が娘の購買意思決定について教育するプロセスにも多様性が生じることを提示していることは、消費者の社会化に関する研究を深める試みであると言える。

第四に、複雑な母娘関係を記述し、解釈するために採用された方法論についても触れておきたい。本稿においては、2種類のインフォーマントに対して異なる2種類のデプスインタビューが実施されていた。これは、日本における母娘関係の特殊性を理解するには、母親と娘それぞれに対して調査を行う必要があったためである。さらには、彼女たちが同席する合同インタビューと、別々に行う個別インタビューという2つの異なるモードを採用することにより、現象のより深く正確な解釈が可能となっている点も特筆すべきであろう。

(2) 限界と展望

最後に本稿は、いくつかの限界も有している。第一に、本稿が調査対象としたインフォーマントの特殊性について触れなければならないだろう。日本は一般的にハイコンテクストな文化圏であり、そのような文化に属する人々は、自身の思いや考えをあまり口に出さないことが指摘されている (Hall 1976)。本稿において収集されたデータは映像による質的データであったが、

その解釈は発話データのみを対象としたものであった。したがって、目くばせや頷きなどの非言語データについても取り上げることによって、現象のより深い解釈が可能となるだろう。

第二に、今回調査対象となった娘はすべて女子高生であり、大学受験というイベントを控えた準備段階にあるインフォーマントが多かった。このような独特のライフステージにおける調査からは、その段階特有の現象が抽出されている可能性が高いと言える。娘の就職や結婚、出産など、母娘関係とファッション購買意思決定に対する影響の出方は、それが属する段階によって異なってくることが予想されるため、結果の解釈には慎重を期すべきである。

第三に、本稿が取り上げたインフォーマント

の母娘関係は比較的緊密かつ良好で、経済的にも裕福な家庭に属するものが多かった。したがって、たとえば関係の希薄な母娘における拡張自己の所有度合いや、ファッション購買への影響については、また別のインフォーマントを対象とした調査が必要である。しかしながら、以上のような限界はむしろ今後の研究の方向性を示唆するものであり、本稿によって発見された事項の価値を減ずるものではない。拡張自己概念と購買意思決定、消費者の社会化との関連については、今後さらなる研究が待たれるところである。

本稿は科研費（基盤研究B(海外) 23402040)の助成を受けている。

表1 インフォーマントのプロファイル

ペア	調査実施日	母親	娘
1	2011年10月15日 10時	母親1 (44歳) パートタイム勤務	娘1 (16歳) 高校2年
2	2011年10月16日 13時	母親2 (46歳) パートタイム勤務	娘2 (15歳) 高校1年
3	2011年10月16日 17時	母親3 (48歳) パートタイム勤務	娘3 (16歳) 高校2年
4	2011年10月29日 10時	母親4 (47歳) パートタイム勤務	娘4 (16歳) 高校2年
5	2011年11月6日 13時	母親5 (48歳) パートタイム勤務	娘5 (16歳) 高校1年
6	2011年11月6日 17時	母親6 (43歳) パートタイム勤務	娘6 (16歳) 高校2年
7	2011年11月23日 10時	母親7 (42歳) パートタイム勤務	娘7 (17歳) 高校2年
8	2011年12月3日 13時	母親8 (47歳) フルタイム勤務	娘8 (16歳) 高校2年

参考文献

Acock, Alan C. and V.L. Bengston (1978), "On the Relative Influence of Mothers and Fathers: A Covariance Analysis of Political and Religious Socialization," *Journal of Marriage and the Family*, 40, 519-530.
 Ahuvia, C. Aaron (2005), "Beyond the Extended Self: Loved Objects and Consumers' Identity Narratives,"

Journal of Consumer Research, 32 (June), 171-184.
 Belk RW. 1975. Situational variables and consumer behavior. *Journal of Consumer Research 2*: 157-164.
 Belk, Russell W. (1988), "Possessions and the Extended Self," *Journal of Consumer Research*, 15, 139-168.
 -----(1989), "Extended Self and Extending Paradigmatic Perspective," *Journal of Consumer Research*, 16 (June), 129-132.
 Bettman, James R., Luce, Mary Frances and Payne, John

- W. (1998), "Constructive Consumer Choice Processes" *Journal of Consumer Research*, vol.25, 187-217.
- Bohannon, Judy Rollins and Priscilla White Blanton (1999), "Gender Role Attitudes of American Mothers and Daughters Over Time," *Journal of Social Psychology*, 139 (2), 173-179.
- Boyd, Carol (1985), "Toward an Understanding of Mother-Daughter Identification Using Concept Analysis," *Advances in Nursing Science*, 7 (3), 78-86.
- Chodorow, Nancy (1978), *The Reproduction of Mothering*, Berkeley: University of California Press.
- Clammer, John (1997), *Contemporary Urban Japan: A Sociology of Consumption*, Wiley-Blackwell.
- Cohen, Joel B. (1989), "An Over-Extended Self?" *Journal of Consumer Research*, 16 (June), 125-128.
- 土居健郎 (1971), 『「甘え」の構造』, 弘文堂。
- Hill, Ronald Paul, Jeannie Gaines, and Mark R. Wilson (2008), "Consumer Behavior, Extended-self, and Sacred Consumption: An Alternative Perspective from Our Animal Companions," *Journal of Business Research*, 61, 553-562.
- Kimura, Junko and Sakashita, Mototaka (forthcoming) "Mother Possessing Daughter: Dual Roles of Extended Self," Russell W. Belk and Ruvio Ayalla (eds) *The Routledge Companion to Identity and Consumption*, Routledge.
- Kravets, Olga and Berna Tari (2008), "A Friend and/or A Foe?: Exploring Activeness of Objects in Consumption," *Advances in Consumer Research*, 35, 771-772.
- McCracken, Grant. (1986), "Culture and Consumption: A Theoretical Account of the Structure and Movement of the Cultural Meaning of Consumer Goods," *Journal of Consumer Research*, 13 (June), 71-84.
- Mead, George Herbert (1934), *Mind, Self, and Society*, C.W. Morris (ed), University of Chicago.
- Mittal, Banwari (2006), "I, Me, and Mine: How Products Become Consumers' Extended Selves," *Journal of Consumer Behavior*, 5, 550-562.
- Moschis, George P. (1985), "The Role of Family Communication in Consumer Socialization of Children and Adolescents," *Journal of Consumer Research*, Vol.11, March, 898-913.
- 信田さよ子 (1997), 『一卵性親子な関係』, 主婦の友社。
- 信田さよ子・上野千鶴子 (2008) 「スライム母と墓守娘」, ユリイカ, 12月号, 青土社, 73-88.
- Roedder John, Deborah (1999), "Consumer Socialization of Children: A Retrospective Look at Twenty-Five Years of Research," *Journal of Consumer Research*, Vol. 26, December, 183-213.
- Sakashita, Mototaka and Kimura, Junko (forthcoming) "Daughter as Mother's Extended Self," *European Advances in Consumer Research*, Vol.9.
- Saren, Michael (2007), "To Have Is To Be? A Critique of Self-Creation through Consumption," *The Marketing Review*, 7 (4), 343-354.
- Schau, Hope Jensen and Mary C. Gilly (2003), "We Are What We Post? Self-Presentation in Personal Web Space," *Journal of Consumer Research*, 30 (December), 385-404.
- Schouten, John W. (1991), "Selves in Transition: Symbolic Consumption in Personal Rites of Passage and Identity Reconstruction," *Journal of Consumer Research*, 17 (March), 412-425.
- Sirgy, Joseph M. (1982), "Self-Concept in Consumer Behavior: A Critical Review," *Journal of Consumer Research*, 9 (December), 287-300.
- Sullivan, H. S. (1947), *Conceptions of Modern Psychology*, Washington, DC: William A. White Psychiatric Foundation.
- Surry, J.L. (1985), "Self-in-Relation: A Theory of Women's Development," work in progress, Stone Center for Development Services and Studies, Wellesley College.
- Takemoto, Yasuhiko. (1986) "AMAE as Metalanguage: A Critique of Doi's Theory of Amae," *Journal of American Psychoanalysis*, 14, 525-544.
- Tian, Kelly and Russell W. Belk (2005), "Extended Self and Possessions in the Workplace," *Journal of Consumer Research*, 32 (September), 297-310.
- Turner, R.H. (1962), "Role-Taking Process versus Conformity," in Arnold Rose, (ed.), *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston: Houghton Mifflin.